

街の見方・歩き方

—地域の歴史と実情、住民の意向に根ざした
まちづくりを進めるために—

元大阪市立大学大学院教授 [都市計画] 住吉蔵部顧問 / 赤崎弘平

1. はじめに

—「まちづくり」とは?—

(1) 用語「まちづくり」の意味

ここに紹介される住吉蔵部の活動は、大阪・住吉で展開される「まちづくり」の一環である。「街づくり」は、その街に必要な道路や施設、あるいは建物といった硬いものや箱ものを設え、そこに相応しい物理的環境条件を整えることを指すが、平仮名で「まちづくり」と表現する時は、まちを整えるプロセスを大切に考える場合に使われることが多い。そこに住み、働き、事業を営み、学び、遊ぶ…など、関係する多くの人々の意見や気持ちのやり取りを繰り返し、暮らしや営みのきめ細かなところまでイメージしながら「まちづくり」していこうというわけである。

(2) まちづくりの手掛かり

岩登りをする時「手掛かり」が要るが、「まちづくり」の場合も同じ。なかでも「まちの将来像」を描くことは大切な手掛かりである。これがないと手順よくことを進めることはできない。

「まちの将来像」の描き方は色々で、土地の利用のし方や、道路や公園、建物などの位置や規模を描くことは大切だが、それらの「計画図」だけが「まちの将来像」を描くことでない。もっと大切なのは私たちや人々の「暮らし」や「営み」の中身を描ききっておくことである。加えて、描いた「像」をどのようにして実現していくのかも組み立てておく必要がある。

(3) 「まちづくり」は総合的プロセス

「まちづくり」は単線的ではなく総合的なシステムであって、それは、

- ①行政と市民の双方向のやり取りや、市民・企業市民、場合によってはそこに関係する事業者なども含めた多方向のやり取りをしながら暮らしと営みの将来像を描き
- ②様々な手立てを用意・工夫してその「まちの将来像」を実現し
- ③それを受け継ぎながら、時々「将来像」を描き直し、永続的に暮らしと営みの改善を生き生きと重ねていくプロセス全体である。

(4) 「まちづくり」を進めるときの心構え

何よりも「まちづくり」は、“地域の歴史と実情、そして住民の意向に根ざし、きめの細かな配慮を施したもの”として進めなければならない。まずは街に出て、街歩きするところから始めよう。そしてまちづくりを実践するにはどのようにしたらよいか、いくつか考えてみよう。まずは街の見方と歩き方である。

2. 「街」の見方と歩き方

(1) 人々の「暮らし」と「営み」を 観察しながら

街歩きをする時、注意深く人々の「暮らし」と「営み」を観察しながら歩くことが大切で、その街の「暮らし」と「営み」にとって、何が大切かを感じ、つかみ取りたい。そして必要があれば、いや時をみて必ず机の上に戻り、色々なデータを調べ、確かめておきたい。

大切なのは日常の「暮らし」と「営み」であるが、その街がお祭りなど〈ハレの場〉となることもイメージしておかなければならないこともある。更には、朝や昼の街だけではなく、その街の夜の姿も捉えておく必要がある。

いずれにしても、その街の「暮らし」と「営み」を豊かにイメージしながら歩きたいが、この冊子は住吉蔵部の皆さんが街歩きを重ねられ、様々なことを学んでこられた大きな成果の一端である。

(2) 「暮らし」と「営み」を「物」と対応させつつ、そして・・・

「まちづくり」は、その街の「暮らし」と「営み」をより良くしていくプロセスであるが、多くの場合それは、建物や各種施設などの「物」との対応で考えなければならないことが多い。街を歩くとき、「暮らし」や「営み」を、まずは「物」と対応させながら観察するというのである。

更に目に見える「物」だけではなく、空気や音、臭いなど、目には見えない「環境」についても注意を払うことを忘れないようにしたい。

(3) 街の成り立ちを知ることは必須

その街の成り立ちや歴史を知っておくことは必須で、街のことを良くお知りの方のお話を伺うことや、街の成り立ちや歴史を机の上に戻り、学び合うことが求められる。

(4) 街の見方・歩き方 —その視点—

街歩きを先にして後で学ぶか、学んでから歩くかはどちらでもよいが、何よりもまずは「街の現状」を自分の足と目で、重層する知識と感性に照らし合わせて認識することが大切。何といたっても「まち

づくり」には〈現場 100 ペン〉が肝要。ではその見方・歩き方はどうすればよいのか。一般的には、次のような見方をすることからはじめるとよい。

- ①「悪いもの」・「悪いこと」を見つける
- ②「良いもの」・「良いこと」を発見する
- ③必要なのに「ないもの」・「ないこと」、「あったらいいもの」・「あったらいいこと」を指摘する。

3. 住吉・蔵の街の読み取り

一街の成り立ちを知ることについて一さてここで、別添の「蔵マップ」を観てみよう。問題はこれを「まちづくり」にどのように繋げていくかである。

この度は紙幅の関係で多くは述べられないが、その一端を示そう。目的は街の成り立ちを知ることである。

(1) 「蔵マップ」と「市街地発展図」の重ね合わせ

大阪市の都市計画部局はこれまでに都市・大阪の都市づくり・街づくりのための図面資料をいくつも作成してきた。例えば大阪市域の「市街地発展図」(図1)がある。これは1885・1886(明治18・19)年頃作成の地形図に始まって、明治末年期、大正期、昭和戦前期、昭和戦後期の地形図を順次重ねて区分したものであるが、これに「蔵マップ」を重ねてみよう。そうすると、蔵が集積した区域は、明治初年期までに市街化されていたところなのか、それとも後年形成された市街地なのか分かる。

加えて、古くからの「街道」を書き加えておく必要もある。それらの「重ね図」は多くのことを教えてくれる。